

多文化主義と民族の共生

兵庫県立三木高等学校 吉田利徳

1. はじめに

今回のテーマである「多文化主義と民族の共生」は、世界の様々な地域で見られ、その内容も文化や宗教の違いのほか、かつて植民地支配を行っていた宗主国の政策などの歴史的な背景、資源ナショナリズムや民族自決などの権利に関わる内容など、複数の要因が絡み合っていることが多い。このため生徒にとっても我々にとっても扱いづらい単元である。よって、少しでも興味をもてるような形で、その対立の原因や状況、対策に向けての取り組みを、授業で紹介することが大切だと考える。そしてその記憶が、その後の生徒たちの日常生活の中で、テレビや新聞で多文化主義や民族問題に関わるニュースを見聞きした時に、「あの時の授業で学んだのはこの地域なのか」などと思いつながる。さらに、このような経験の繰り返し、グローバルな視野をもって生活していかなければならない、次世代を担う生徒の知的好奇心を引き出し、広い視野や多様な発想を導くことにもなるであろう。

2. 多文化主義

「多文化主義」という言葉を聞くと、何となくその意味を理解できるような気がする。ところが実際に授業のなかで生徒にその意味を質問してみると、「たくさんの文化が存在していること」とか、「多くの民族が存在すること」などの解答が返ってくるのが大半である。やはり、まずはその正確な意味を確認することが必要であろう。

多文化主義 (multiculturalism) を広辞苑では「一つの国・社会に複数の民族・人種などが存在するとき、それらの異なった文化の共存を積極的に認めようとする立場のこと」と説明している。また、『新詳地理資料 COMPLETE 2008』(以下資料集)p.183左上の用語の説明にあるように、「英語以外の様々な言語によるテレビ放送、異文化理解のための外国語教育など、多様な文化を互いに尊重し合う社会の構築を進める政策」とある。つまり、「多文化主義」という言葉には、

多様な生活様式や宗教、特徴を認め合おうとする積極的な態度が含まれていることに気づかせたい。

3. オーストラリアにおける多文化主義

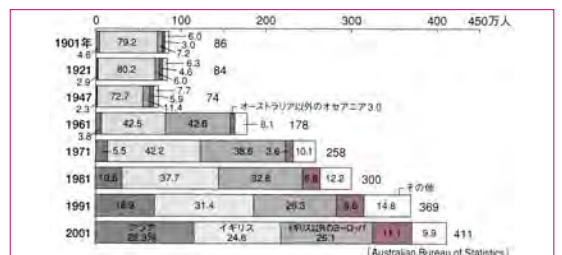
オーストラリアは移民によりつくられた国である。そのことは『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』(以下教科書) p.122にある次の写真を見ると、肌や髪の毛の色の違いからもよくわかる。



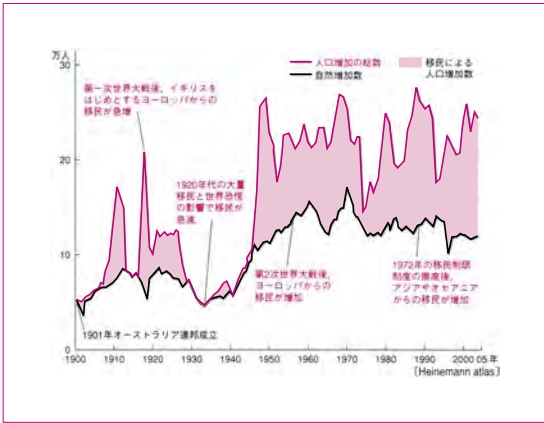
『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』 p.122②

しかしながら、現在のオーストラリアの多様な民族構成が、建国当初から見られたわけではない点も、もちろん紹介することが必要である。1901年のオーストラリア連邦成立以降、非ヨーロッパ人の移民を制限して白人優先の国家建設が進められていた。つまり、アジアにヨーロッパ型の国家、アジアの中のイギリスを建設しようとする意図のかつ差別的な移民制限法があったのである。これを「白豪主義」という。

下のグラフを見るとその移民制限の傾向がよくわかる。1947年まではイギリスからの移民が大半を占めていることは、まさに「白豪主義」を表している。



外国生まれのオーストラリア人の内訳
『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.183①



オーストラリアの人口増加と移民の歴史
 『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.183③

次に注目すべき点は1961年以降のグラフに見られる、イギリス以外のヨーロッパからの移民の増加である。これは、オーストラリアが第二次世界大戦後の経済成長期に、多くの労働者を必要としていたこと、さらに上のグラフにも表れているように、ちょうどこの頃は、第二次世界大戦で荒廃したヨーロッパでの余剰労働者が大量に発生しており、その人たちが移民としてオーストラリアにやってきたことが原因であるといえる。さらに1972年の移民制限制度の撤廃後、非白人であるアジアやオセアニア出身の移民の増加も確認しておきたい。これは、オーストラリアが経済成長を進めていくにあたり、未熟練労働者としての移民の受け入れを増加させたことによるものである。つまり、安価な未熟練労働者を獲得するためには、ヨーロッパではなく、アジアとのつながりを意識せざるを得なかったのである。さらに1974年のイギリスのEC加盟により、旧宗主国であるイギリスとの優先貿易ができなくなり、新たな貿易相手先が必要となった。このような変化により、アジア太平洋諸国との協力関係を築かざるを得なかったことも伝えておきたい。

このように、オーストラリアの経済発展や旧宗主国との関係の変化など、経済的・社会的環境が変化したことや、差別的な政策に対する外圧のため、白豪主義政策を維持できなくなり、多様な民族を認めていこうとする多文化主義が進んできた。このような背景により、現在のオーストラリアができたのである。

4. イギリス連邦について

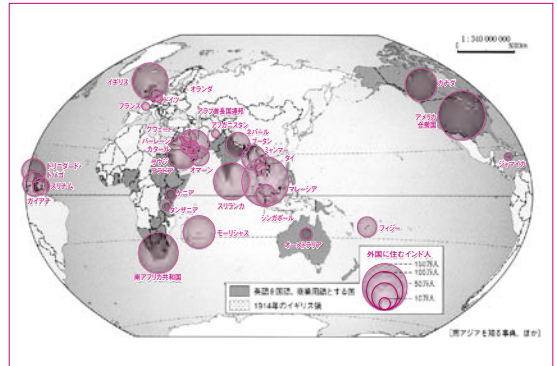
先述の内容に少し出てきたが、オーストラリアはかつてイギリスの植民地であり、イギリス連邦に加盟し

ている。次に国旗からその関係を見ていきたい。



『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.183

上に挙げたそれぞれの国の国旗には、そのデザインの中にユニオンジャックが入っていることから、かつてのイギリス植民地であることがわかる。このように、国旗のデザインやその変化を見ると、その国の歴史や変化が見てとれる。また、イギリスの場合、かつての植民地政策のなかで、植民地におけるプランテーション労働者や鉱山労働者としてインドから各植民地への移住を進めた結果、インド系住民が各地に居住し、そこで多文化の社会生活を展開していることにつながることも注目しておきたい。



『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.153①

5. 国旗から見る多文化主義とその意義



『世界を学ぶ高校生の地理A 最新版』 p.123③

南アフリカ共和国では、1994年に新しいデザインの国旗が制定された。これはアパルトヘイト（人種隔離政策）が1991年に廃止され、差別のない新たな共生社会への前進の表れである。かつての国旗のデザインに地にある横の三色旗はオランダ国旗、中央部に並ぶ小さな三つの国旗は左側からイギリス国旗、オレンジ自由国国旗、トランスヴァール共和国国旗を表している。

このことも、オランダからイギリスへと宗主国が変化したことや、ボーア人（オランダ系住民）がイギリスの支配下において二等国民として差別され、自らをアフリカーナとよび、内陸部でトランスヴァール共和国やオレンジ自由国を建設したことなど、歴史的背景が見える。さらに、コイサン人やズルー系民族など先住民である黒人を表すものは何も描かれていないことにも気づかせたい。

現在の国旗のデザインは赤・白・青の旧国旗にも使われている色と共に、黒・黄・緑の3色が組み合わさり、すべての人たちの協力をシンボル化した旗である。非公式ではあるが、黒は黒人と他のアフリカ諸国とのつながり、黄は金に代表される豊かな地下資源、緑は豊かな自然を表し、赤は過去の対立のなかで流された血、白は南アフリカの白人の国民と平和、青は空と二つの海（大西洋とインド洋）をそれぞれ示しているといわれている。この色がもつ意味からも多文化主義を意識させたい。さらに、新政府は強引な黒人と白人との宥和政策を行わず、黒人の権利の充実と地位向上を着実にを行うことを優先させ、黒人の民族間にある格差縮小も意識して、11の民族語を公用語として認めている。その取り組みは一つの国・社会に複数の民族・人種などが存在するとき、それらの異なった文化の共存を積極的に認めようとする典型として、国際社会でも高く評価されていることも紹介しておきたい。

そのほか、右上に挙げた国のように、それぞれの国



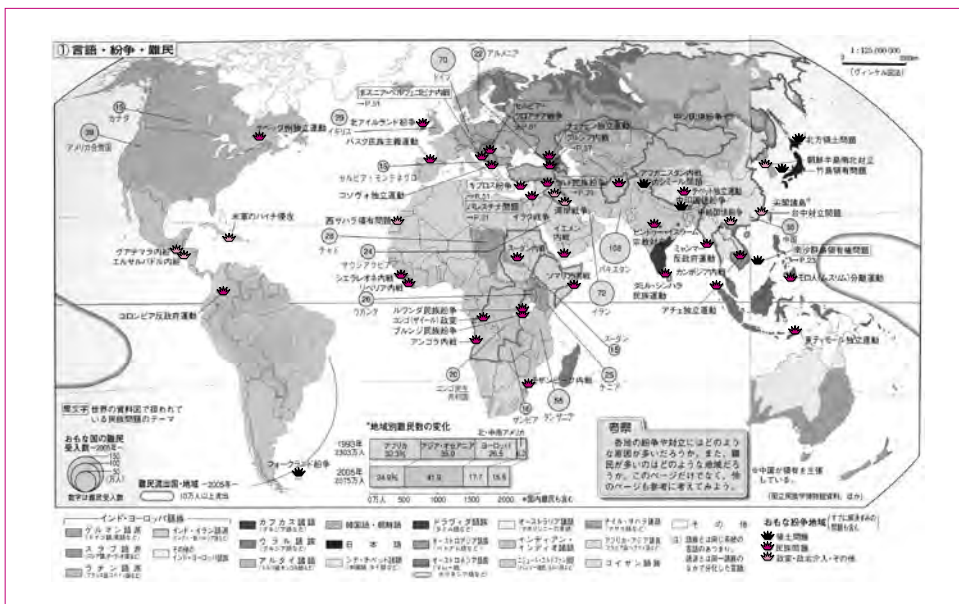
『新詳地理資料 COMPLETE 2008』 p.123

旗に平和への願いや人権意識、宗教の共存など意味がある。複数の事例を確認することにより、多文化主義を意識する視点を定着させることも必要である。

6. まとめ

民族、宗教対立は古くから続いてきており、現在でも紛争は続いている。その原因は様々で、政治や宗教のほか、歴史的、経済的な対立などである。

下の地図を見て紛争・対立の原因を考えさせる。そうすると、領土問題や政変・政治介入よりも、民族対立が原因の紛争が多いことがわかる。この地図に挙げられている全ての事例を授業の中で取り上げて、詳細に紹介することは難しい。しかしながら、グローバル化した世界で生活する者として、生徒自身がおかれている状況だけでなく、他の生活や宗教、考え方の違いをしっかりと確認することは必要である。そしてそれを認めていこうとする態度を身に付けることこそが、豊かな未来へと前進するために必要である。さらにそれが、平和な世界の実現につながると考える機会にしてほしい。



『新詳高等地図 初訂版』 p.121①